

減汗型外胚葉異形成症が疑われる部分性無歯症患児の歯科的管理の1例

○平野洋子, 廣田和子*

医療法人秀和会小倉南歯科医院,*廣田歯科医院

【目的】 演者は、減汗型外胚葉異形成症を疑う部分性無歯症の患児に遭遇し、歯科管理を3年間行ってきたので、その経過を報告する。

【症例】 当院初診: 平成24年4月13日(2歳7ヶ月) 男児 主訴: 乳歯萌出遅延

現病歴: 1歳2ヶ月頃にA|A萌出後、他の乳歯が萌出せず、1歳半健診を受けた近医より神奈川県立こども医療センターに紹介され、その後転居のため当院受診。

既往歴: ①減汗型外胚葉異形成症(家族の意向で確定診断なし) ②アトピー性皮膚炎

家族歴: 第一子。4歳下に妹。母親の叔父と従兄弟に歯数欠如あり。

現症: [全身所見] 皮膚は乾燥気味で浅黒く、眉毛薄く頭髮はやや疎で縮毛傾向。アトピー性皮膚炎と食物アレルギーあり。それ以外は健康状態良好。

[口腔内所見] 萌出歯はA|Aのみで円錐歯。臼歯部に乳臼歯萌出による歯肉膨隆あり。エックス線写真所見では、乳歯はA|Aと上下左右第2乳臼歯のみ。顎骨内に1|1と上下左右第1大臼歯の歯胚あり。舌突出癖が見られた。

処置と経過: 初診当初は低年齢のため、舌突出癖の改善を目標に摂食訓練を行い、3歳から印象採得の練習も開始。上下左右第2乳臼歯萌出完了し、咬頭対咬頭ではあるが咬合状態安定したため、4歳5ヶ月時に臼歯部クラスプ付きの上下義歯を装着した。上顎義歯はすぐに装着できたが、摂食訓練が奏功せず舌突出癖が悪化しており、下顎義歯装着は困難だった。試行錯誤の結果、約1年後に使用状態が安定したが、現在、臼歯部が反対咬合になりつつある。なお母親から不明瞭な発音について相談あり、5歳3か月時に北九州市立総合療育センターへ紹介した。

【考察】 臼歯部咬合の変化の原因は、下顎義歯が使えなかった間フリーの状態に近かった下顎臼歯間歯列幅径が、クラスプで固定されていた上顎臼歯間歯列幅径より増加したためと思われる。今後上顎臼歯間歯列幅径の拡大方法を検討する。また、先天異常の確定診断を望まない家族の心情に寄り添った対応を心掛けたい。

アンケートからみた学校での歯科保健指導が子どもたちの歯みがきに及ぼす効果について

○新生育子

(久木野歯科診療所 熊本県)

【目的】 学校歯科医の筆者は、16年前から学校と協力して、子ども達のより良い歯みがき習慣の確立を目指し、独自の歯科保健活動を行って来た。その取り組みの内容については「デンタルヘルス・リテラシーの向上を目指した学校歯科保健指導の試み」と題し2009年11月に本学会にて発表した。今回は、近隣の学童生徒(850名)を対象にアンケート調査を行い、学校での歯科指導が子ども達の歯みがきに及ぼす効果について調べた。

【方法】 当地区を含めた近隣18校の小学4年生、6年生、中学3年生を対象に歯科保健指導に関するアンケート調査を行った。アンケートは「今までに歯科指導を受けたことがあるかどうか」の問いにはじまって、歯みがきに関する16の質問からなり、複数の回答の中から自分に合った答えを選んでもらった。アンケートは全学年共通であり、有効回答数782枚をデータベース化し、今回は指導を受けた記憶の程度に注目して学年毎で多角的なクロス集計を試み、適合度検定(X²検定)を行った。

【結果】 中学3年生グループにおいては、指導を受けた記憶が多い生徒の方が、記憶がほとんど無い生徒より、有意水準5%で「面倒くさいと思う時でも、思い直して歯みがきをする」の間で差が認められた。さらに「歯垢ということばを知っている」「歯垢の正体を知っている」「元気な歯ぐきと歯肉炎の歯ぐきの違いがわかる」等の問いでは、有意水準1%でも明瞭な差が認められた。

【考察】 アンケート分析から、学校での歯科指導が記憶に多く残っている生徒ほど、デンタルヘルス・リテラシーが向上していると見られ、このことから指導はより一層児童生徒の印象に残るものとなるように心掛けねばならないと思われる。